

# アメリカにおける幼小接続カリキュラム 開発過程

— 国際幼稚園連盟における論争とデューイ・スクールの実践に着目して —

山 本 孝 司

The process of developing a kindergarten - first grade curriculum in  
the United States: Focusing on the controversy in the International  
Kindergarten Union and the practice of the Dewey School

Takashi Yamamoto

## はじめに

アメリカにおける幼小接続は、19世紀末から20世紀初頭にかけての進歩主義教育の展開過程で一応の完成をみた。その伏線としては、アメリカ幼稚園運動の草創期以来幼稚園教育を牽引してきたフレーベル主義の批判と克服があった。

幼稚園は、1840年にフレーベル（Friedrich Wilhelm August Fröbel, 1782-1852）がフランケンブルクに創設した「一般ドイツ幼稚園」（Der Allgemeine Deutsche Kindergarten）にはじまり、彼の命名した“Kindergarten”という呼称とともに世界中に普及していったが、アメリカには南北戦争前夜にドイツ人移民の手によって移植された。1840年代にはドイツ国内に十園の幼稚園が開設されていたが、1851年の「幼稚園禁止令」で、これらの施設が無神論と社会主義の施設という理由で閉鎖を余儀なくされた<sup>(1)</sup>。さらに1848年のウィーン三月革命の波及によるドイツ革命の反動によって国内の自由主義者が国外へと流出していき、アメリカにも数多くのドイツ移民が流入した。この移民のなかにはフレーベルの幼稚園文化を継承した者も含まれていた<sup>(2)</sup>。

このような経緯で、幼稚園の広がりとともにフレーベルの幼稚園教育思想も1880年代までの間に全米に普及していったが、1890年代になると新心理学とそれを背景にした児童研究を援用としたフレーベル主義批判が幼稚園教育内外で生起し、その過程で幼稚園カリキュラム策定および幼小接続カリキュラム開発も行われた。

本稿では、アメリカ幼稚園運動の後半期、すなわち19世紀末から20世紀初頭にかけての進歩主義教育期における幼小接続カリキュラム開発へと至る流れを、幼稚園教育思想の新旧対立に着目しつつ、アメリカにおける幼小接続カリキュラムの背景となる原理の導出を試みたい。

## 1. 幼稚園教育の差別化と小学校への接続

### (1) 幼稚園運動草創期の幼稚園の位置づけ

1820年代から1860年頃までのアメリカにおける就学前の子どもの教育施設としては幼児学校 (infant school) が主流であった。幼児学校は発祥地イギリスでそうであったように、貧児救済のという福祉的側面を有していた。この種の学校では、ペスタロッチの理論とバル・ランカスター法に基づく理論がその指導原理として採用されていた。

アメリカにおいて最初の英語幼稚園開設者であったピーボディ (Elizabeth P. Peabody, 1804-1894) は、幼稚園教育導入に際して幼児学校を引き合いに出しながら幼稚園について次のように特徴づけている。「それ (幼稚園) は、貧しい労働者の子どもたちを受け入れ、彼らの母親が必要な労働に従事している間、火事や通りから遠ざけることを目的としているような、比較的狭い機関としての古風な幼児学校 (old-fashioned infant-school) ではない」<sup>(3)</sup>。1830年代には『アメリカ教育雑誌』 (*American Journal of Education*) などに、幼児学校よりも家庭教育を推奨する記事が登場し、こうした影響もあってアメリカにおける幼稚園草創期は新たな幼児教育のあり方が模索されていた時期でもあった。

ピーボディに関しては、1859年にドイツ語幼稚園を開設していたシュルツ夫人 (Mr. Margarethe Meyer Schurz) とその教育を受けていた娘アガテ

(Agathe) との面談を通して、幼稚園教育に関する情報を得て幼稚園の魅力に取りつかれるのであるが、その際に彼女が幼稚園に見たのは、フレーベルの命名通りの「子どもの庭」(kinder-garten) であり、こうした意味合いで彼女は「学校」とは異なる施設としての幼稚園を位置づけ、その普及に努めたのである<sup>(4)</sup>。

草創期における幼稚園への関心のこうした特徴、すなわち学校とは区別される施設としての幼稚園への期待の込められた関心は、全米への幼稚園普及の原動力となるのであるが、制度的な小学校との接続を経て、1890年代に進歩主義教育が生起するまで、デフォルトであり続けた。

## (2) 制度的な幼小接続

幼稚園カリキュラム策定に先立って幼稚園の学校教育体系への導入が進められた。その発端となったのは、1873年のセントルイスにおける公立学校幼稚園設立である。アメリカ初となる小学校に附設された幼稚園は、当時のセントルイス教育長ハリス (William Torrey Harris, 1835-1909) の監督下でブロウ (Susan E. Blow, 1843-1916) によって開設された。

セントルイスにおける幼稚園の学校教育体系への導入は、制度的に小学校に附設する形で進められたが、小学校入学年齢以前の子どもたちが就学する施設を設けることによって、子どもたちへ望ましい習慣を身に付けさせることを目的としていた<sup>(5)</sup>。幼稚園導入以前にハリスは、小学校の入学年齢の引き下げを試みていたが、議会で承認を得ることができなかった。そこで幼稚園という別施設を小学校に附設することで実質的に就学年齢の引き下げを行ったのである。

ただし公立学校幼稚園はすぐには普及することなかった。一つには幼稚園の維持費に関するものであり、もう一つは州法で定められた就学年齢が壁になり小学校に附設されることはなかった<sup>(6)</sup>。こうした壁を克服しつつ1890年代から1900年の間の十年間に公立学校幼稚園は一般的になっていった。公立学校幼稚園の普及は、幼稚園全般にとってもその広がりにつけしたが、この結果として幼稚園に関わる人々の職能団体も組織されていく。

## 2. 国際幼稚園連盟の設立と幼稚園教育の普及

### (1) 国際幼稚園連盟の設立

幼稚園普及を目的に掲げる組織が、1870年代に二つ設立されている。一つは、1876年のボストン・フレーベル協会（Boston Froebel Association）で、1877年にピーボディによってアメリカ・フレーベ連盟（American Froebel Union）に再編された組織、もう一つは、1879年にデトロイトで組織された西部幼稚園協会（Western Kindergarten Association）である。両者は1884年に全米教育協会（National Education Association）の幼稚園部門ができるまで、アメリカ社会での幼稚園への関心を高めることに貢献した。

1892年に開催された全米教育協会第2回大会において、幼稚園部門の独立が承認され、これが国際幼稚園連盟という名称をもつ団体となった<sup>(7)</sup>。この団体の活動目的には、幼稚園の情報収集および周知、幼稚園への支援者の増大と幼稚園の設立の促進、幼稚園教員養成の拡充が掲げられた。

記念すべき第一回大会は、1896年にニューヨークのコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジで開催された。翌年の第二回大会は、セントルイスにフレーベルに直接指導を受けたビュロー夫人（Baroness von Buelow-Wendhausen）を招いて盛大に開催され、その後もフィラデルフィア、シンシナティ、ブルックリン、シカゴ、ボストンと全米各地で毎年大会が開催された。

### (2) 国際幼稚園連盟内における新旧対立

幼稚園はフレーベル主義の教育原理に支えられながら普及していったが、フレーベルの幼児教育思想は神秘主義的な性格が色濃く、実践においては象徴主義的な側面が強調されていた。こうしたフレーベル主義の教育原理の性格に対して、1890年以降に幼稚園教育実践の内外から批判が出てくる。

1890年代には、新心理学を背景とする児童研究運動が生起することで幼稚園運動に新たな展開がもたらされた。具体的には、それまで幼稚園運動を牽引してきたフレーベル主義に対する批判である。フレーベル主義批判は、幼児教育家の間でアンナ・ブライアン（Anna Bryan, 1858-1901）の講演「文字は殺す」（The Letter. Killeth）によって始まった。教育実践に理論的な説明を与え

る研究者からは、ホール（Granville Stanley Hall, 1844-1924）やソーンダイク（Edward L. Thorndike, 1874-1949）、理論と実践の仲介者としてデューイ（John Dewey, 1859-1952）やキルパトリック（William H. Kilpatrick, 1871-1965）がフレーベル主義に対する批判を展開した。

他方で、フレーベルの主唱する神秘主義を堅持しようとする幼稚園実践家もいた。彼女たちは恩物を重視し、象徴主義を追究することでフレーベル主義を保守しようと努めた。その代表は、かつてセントルイスにおいてハリスとともにアメリカ初の公立学校幼稚園を創設したプロウであった。

フレーベル主義を保守しようとするプロウ側とフレーベル主義を批判する側との前哨戦ともいべき出来事が1895年に開催された幼稚園教員の会合で起こっている。その会合にはホールも出席しており、彼は、幼稚園教師が生物学と心理学の新しい科学的貢献を無視することが多すぎると主張して、フレーベル主義の幼稚園の理論と実践に対する具体的な批判を提起した。それに対して、出席していた35人の幼稚園教師のうちプロウを含む33人がホールの発言をフレーベル主義への攻撃として受け取り途中退出したというエピソードである。途中退出しなかった2名は、ホールのサマースクールの元学生であったパティ・スミス・ヒル（Patty Smith Hill, 1868-1946）とブライアンであった<sup>(8)</sup>。

国際幼稚園連盟内での対立が顕在化したのが、プロウとヒルによって行われたコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジにおける公開講義である。この講義は、フレーベル連盟、幼稚園協会、ティーチャーズ・カレッジが後援する幼稚園に関する10回の無料公開講演として始まった。ヒルは、幼稚園のカリキュラムにおける口述、模倣、独創性、象徴主義といったフレーベルの理論と実践の弱点を指摘した。プロウはフレーベルの哲学と幼稚園の実践に関する伝統的な講義プログラムに沿った。しばらくの間、両者は教員養成学校での養成に関する妥協案を練った。プロウは、フレーベルの哲学的原理の概要と、彼女が「フレーベルの思想の具体的な具体化」と呼ぶ恩物とオキュペーションの利用に関する伝統的な授業を提供した。一方、ヒルは「幼稚園会議」で、フレーベル派の幼稚園プログラムを「教育、児童研究、心理学の最近の発展」の観点から批判的に検討した。当初、プロウとヒルはティーチャーズ・カレッジにおけるす

すべての幼稚園研修を共同で担当する形をとっていた。

ブローは講義の中で、「統一性」、「自由」、「象徴主義」という未解決の哲学的問題に関する議論を再燃させようと努めたが、彼女の戦略は、哲学的な議論の複雑さによって、その時期に隆盛を極めた心理学的進歩を曇らせることだった。ヒルは、子どもの「精神的な統一」という概念をきっぱり無視し、教育における社会的統一というデューイの思想を支持した。さらに、ヒルは象徴主義の「高次の形式」を拒否し、幼稚園における自由についてより広い概念を提示することで、旧来のフレーベル主義者が「知的」と「幻想」を人為的に区別し、それが教育の新たな機会を提供していると批判した<sup>(9)</sup>。

こうした流れのなか、国際幼稚園連盟内でも、ブローに代表されるフレーベル主義保守派とヒルに代表される進歩主義派の対立が激化した。この状況を改善するために国際幼稚園連盟内に1903年に小委員会が組織された。この委員会は、公平な代表を確保するために、ブロー、ルーシー・ウィーロック (Lucy, Wheelock, 1857-1946)、ヒルで構成されるグループを、保守的、保守進歩派、そして進歩派とし、各グループのメンバーを選出した。デューイとハリスは、とりわけ国際幼稚園連盟の「ガイド、哲学者、そして友人」として陪席人に選ばれた。最終的な選択により、19人委員会が結成された<sup>(10)</sup>。

ブローにとっては、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジにおけるヒルとの公開講座は実質的に自身の敗北であったが、この委員会においては、「アメリカの幼稚園の保守的な信条を策定すること」が、彼女の幼稚園運動への最後の貢献になるとの自覚があったようである。とはいえ、国際幼稚園連盟内における進歩主義派の優勢は当初より明らかであった。ヒル (コロンビア大学)、アリス・テンプル (Alice, Temple, 1871-1946) (シカゴ大学)、ブライアン (アーマー研究所) らデューイの信者たちは、自分たちがかつてフレーベル主義の牙城であった連盟に進歩的な教育改革をもたらそうと意気込んでいた。委員会の議事を平和的に進めるために、穏健なウィーロックが議長に選出されたが、心理学、材料、方法、および象徴に関する重要な小委員会は依然として進歩主義者によって占められた。両派による相互理解が試みられるも、討論を通した最終報告書は、それぞれの派閥で別々に論稿が作成され、それを合体させる形で

提出された<sup>(11)</sup>。

### 3. 幼稚園と児童研究の論争－「実験学校」設立

#### (1) 児童研究によるフレーベル主義批判

1890年代になると一部の幼稚園は「子どもの庭」ではなく、「実験室」(laboratory)の様相を呈してくる。こうした変化の背後には、児童研究運動(Child Study Movement)の展開があった。1870年代にドイツの大学で、生物学や生理学の類似化学として生じた新心理学が、1880年代後半にアメリカの学界にも影響を及ぼし、1890年代には子どもの発達段階の特徴を実験的実証的に研究することで、より効果的な実践理論を再構築する試みが登場する。その中心となったのがホールであるが、彼は1900年に論文「アメリカの幼稚園が持ついくつかの欠点」(Some Defects of the Kindergarten in America)を発表し、フレーベル思想の神秘主義とフレーベル主義者の形式主義的实践に対する批判を展開した<sup>(12)</sup>。

#### (2) 実験学校の設立

デューイがシカゴ大学在職中の1896年に大学附属の「実験室学校」(後の「デューイ・スクール」)を開設し、そこで経験主義教育理論に基づく実践を指導したことは周知のことである。この学校の指導にデューイが関わったのは1903年までという限られた期間であったが、1898年に行ったこの学校の理論および実践に関する彼の講演が『学校と社会』(*The School and Society*)の形で著されている。この中で、実験室学校がフレーベルの教育思想を主唱するものであると前置きをしつつ、若干の改良の余地があると述べて、フレーベルの象徴主義に対し次のように批判している。「幼稚園にはこれまで次のようなことを主張する奇妙な、ほとんど説明のつけようのない傾向が存在している。曰く、活動の価値はそれが子どもにとってもつところの意味にあるのであるから、それゆえに使用される教材はできるだけ巧みに仕立てられたものでなければならない、と。そして、子どもが現実的な事物をとりあつかったり、現実的な行為をしたりすることを慎重に避けさせねばならない、と。だから、園芸活動とい

うと、ひとは種を蒔くのではなくて、砂粒を撒く遊びをやらせることになる。子どもはまねごとの部屋をまねごとの箒と雑巾で掃除する。かれはまた、幼稚園のそとで遊ぶときに用いるおもちゃの茶器をつかわずに、たんに、平面に切られた紙をつかって食卓の仕度をする」<sup>(13)</sup>。こうした実践はフレーベル主義幼稚園の典型であったが、それに対するデューイの対案が示されているのが『学校と社会』の中の次の行である。「家屋・家具・器具などの仕組みをもつ家庭生活は、家庭内でいとなまれる諸々の仕事とともに、それゆえに、子どもと直接の、現実的な関係をたもっている教材、また子どもが自然にこれを想像的な形式で再現しやすい教材を提供する。家庭生活はまた倫理的諸関係にじゅうぶんに充ちており、子どもの道徳的側面にたいしてゆたかな糧を供するところの諸々の道徳的義務を教えている」<sup>(14)</sup>と。

実際の実践に関しては、メイヒュー (K. C. Mayhew) とエドワーズ (A. C. Edwards) による『デューイ・スクール』(*The Dewey School, The Laboratory School of the University of Chicago 1896-1903*) で詳述されている。デューイ・スクールには、小学校とは区別される厳密な意味での「幼稚園」は設置されていなかった。子どもたちは発達年齢ごとに十一のグループ、すなわちグループ I、II (4～5歳)、グループ III (6歳)、グループ IV (7歳)、グループ V (8歳)、グループ VI (9歳)、グループ VII (10歳)、グループ VIII (11歳)、グループ IX (12歳)、グループ X (13歳)、グループ XI (14～15歳) に分けられていた<sup>(15)</sup>。このうちグループ I、II はサブプライマリーと呼ばれていた。このグループ I とサブプライマリーという呼称から、小学校 (プライマリー) 以降との連続性が意識されていたことがうかがえる。

同校のカリキュラムのうち、とりわけオキュペーションに焦点を当てると、その連続性がよく顕れている。サブプライマリー (グループ I、II) では「家庭のオキュペーション」、プライマリーのグループ III では「家庭を支える社会的オキュペーション」、グループ IV では「衣食住」に関わる基本的なオキュペーションに歴史的発展が加味されていた。発達年齢が進むにつれてオキュペーションの内容が家庭から社会へと空間的に広がり、また現在のことから過去や未来へとつながる時間的な広がりをもつように展開する。

デューイは、教育施設間の接続に関心があったというよりも、周知のようにコミュニティの中心に学校を位置づけ、学校と社会との接続に関心を向けていた。学校は小さな社会であり、現在における学校での民主的な生活を通して、未来社会の民主主義を実現していくという信念を持ち続けていた。したがって、彼の「接続」は空間的にも広大な広がりをもつと同時に、自ずと過去、現在、未来という時間的な広がりをもつものであった。

時系列的な「接続」の視野をもっていた点では、デューイと同様にヘーゲル哲学の影響を受けたプロウも同様であった。ただし、彼女の場合は「歴史の一般的な傾向がそれぞれの特定の人生の意味を示唆しているように、その一連の期間は、個々の発達の上昇段階への明確な対応を提供する。人類には言葉の通じない幼少期、夢と予感に満ちた子ども期、自己主張が強く、楽しく、野心的で思弁的な青春期、冷静に反省し、規律ある活動を行う青年期がある」<sup>(16)</sup>と述べるように、人類史的視点から精神を中心に系統発生史に基づいて個人が弁証法的に発達すると考えた点でデューイとは異なっていた。

幼稚園教育家の進歩主義派は、デューイの教育原理のうち、時系列的には限られた範囲、すなわち幼稚園と初等学年にフォーカスを当て、幼稚園カリキュラムの標準化ならびに幼小接続カリキュラムの開発に着手していく。

## 4. 実験学校を受けた幼小接続カリキュラム開発

### (1) 幼稚園カリキュラム策定

デューイによるシカゴ大学附属実験室学校の実践は、幼稚園教育家たちにとって、初等教育へのアプローチ・カリキュラム考案の有益な参考事例となった。とりわけ進歩主義幼稚園教育家の実践に強く影響した。この影響下、1919年に国際幼稚園連盟によって幼稚園カリキュラムが策定された。カリキュラム策定にあたって小委員会が組織され次のようなメンバー構成であった。すなわち、アリス・テンプル（委員長）、ジュリア・A・アボット（Julia A. Abbot）、ルイス・アドラー（Louis Adler）、エリザベス・ハリソン（Elizabeth Harrison）、アンナ・H・リッテル（Anna H. Little）、グレイス・E・ミックス（Grace E. Mix）、ルエラ・A・パーマー（Luella A. Palmer）の7名である。「幼

幼稚園カリキュラムは、4歳から6歳までの子どもの諸要求に適う価値がある、さまざまな教材や活動から構成される」とされ、この年齢の子どもたちの経験を代表する教材として、「自然物や現象に触れること」(自然学習)、「人間や人間の活動に触れること」(家庭と地域社会)、「人間の知性の所産に触れること」(文学、音楽、芸術等)の領域に区分けされていた<sup>(17)</sup>。

このカリキュラム提示の時点において、幼小接続に関する次のような説明が含まれていた。「今日の考え方では、子どもの生活において四歳から八歳までの時期は心理的にも一つの時期であり、幼稚園と第一学年の教育方法は共通の一般的特質を有するべきものである、とされている。この考え方を論理的につきつめると、幼稚園と第一学年の区別はなくなる。区別がある所では、そのどちらかが正しい根拠を欠いており、そしていずれか一方の学習がもう片方の学習に関連して組織されてはいないことは明らかである」<sup>(18)</sup>。

## (2) 幼小接続カリキュラム開発の試み

この幼稚園カリキュラム策定による幼稚園教育の標準化で予告されていた小学校第1学年との接続について国際幼稚園連盟は、ヴァンデウォーカー(Nina C. Vandewalker, 1857-1934)を委員長とする小委員会<sup>(19)</sup>によって3年後の1922年に「幼稚園—第1学年カリキュラム」(A Kindergarten-First-Grade Curriculum)を提示している。この中では、教材として、地域社会生活と自然学習(Community Life and Nature Study)を中心に、読み方、書き方、言語、文学、工業と美術に分けて、幼稚園段階の学びと小学校第1学年の学びの連続性を持たせることの重要性とその方法について解説してある<sup>(20)</sup>。

翌年1923年にはヒルがコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ附属ホレスマン小学校(The Horace Mann Elementary School)での実践から考案した「コンダクト・カリキュラム」(Conduct Curriculum)を発表し、「子どもの思考、感情および行為を日々変化させることによって望ましい習慣と性格が形成されるようにすること」<sup>(21)</sup>を上位目標に、「幼稚園および初級学年の子どもの環境は、その身体的発達のためにあらゆる機会を与えられなければならない。そのために、衛生的な環境、太陽の光、空気に配慮し、彼らの活動を促す

環境や素材の中を自由に移動することを奨励することが重要である」<sup>(22)</sup>として幼稚園と小学校第1学年の接続を意識した実践理論を提唱した。

さらに、幼稚園カリキュラム策定の委員長を務めたテンブルは、後年シカゴ大学教育学部における幼稚園教員養成に関わるが、彼女はその時の同僚であったパーカー (S. C. Parker) と共著で1925年に『幼稚園—第1学年の統一的教育』(*Unified Kindergarten and First-Grade Teaching*) を著し、幼小接続カリキュラムの考案をしている<sup>(23)</sup>。

## 結びにかえて

以上、本稿では、国際幼稚園連盟とそのメンバーによる幼小接続カリキュラム開発までの流れについて、国際幼稚園連盟内におけるフレーベル主義をめぐる新旧論争と「接続」の先行事例としてのデューイ・スクールの実践に着眼してみてきた。

アメリカ幼稚園運動において幼稚園の性格は、1870年代の公立学校幼稚園の登場により制度的な小学校との接続、1890年代からの新心理学と児童研究を背景にした進歩主義教育理論によるフレーベル主義に対する批判を経て、「学校化」していったように見えるが、デューイ・スクールの実践が例証するように、小学校のカリキュラムを幼児教育に前倒しすることを通じた幼稚園の「プレスクール化」ではなく、むしろ幼稚園の子どもたちのもつ活動的要素を積極的に小学校教育にも導入したというのが実際である(ただし、その際にフレーベルが幼稚園を創設するときの「子どもの庭」という性質は薄められ、子どもたちが主体的に活動する「実験室」としての性質が強められた。)

国際幼稚園連盟による標準化された幼稚園カリキュラムの策定および幼小接続カリキュラム開発の時期には、フレーベル主義保守派代表のプロウはすでに他界しており、連盟内での新旧対立にも一応の決着をみていた。総論としては、進歩主義派による勝利であったが、「接続」の空間的・時間的な範囲については、接続カリキュラムを提示した各人で一致をみていたわけではない。この「接続」に関するそれぞれの実践理論の差異についての検証が今後の課題として残されている。

## 【注および引用】

- (1) 一説によると、幼稚園が当時のプロイセン政府から異端視されたのは、フレーベル甥であったカール・フレーベルと間違われたことによるが、実際には甥もフレーベルの幼稚園の思想形成と運営に深くかかわっていたとされる。
- (2) アメリカで最初の幼稚園はドイツ系移民のシュルツ (Mrs. M. M. Schurz) によって 1855 年にウィスコンシン州ウォータータウンに開設され、ドイツ系移民によるドイツ語幼稚園がその他の土地でも開設されていった。アメリカ人師弟を対象とする幼稚園は、ピーボディ (Elizabeth P. Peabody) によって 1860 年にボストンのピンクニー通り 15 番地に英語幼稚園として開設された。
- (3) Peabody, E.P., *Moral Culture of Infancy, and Kindergarten Guide, with Music for the Plan*, New York, J.W. Schemerhorn & Co., 1870, p.9.
- (4) Vandewalker, N. C., *The Kindergarten in American Education*, New York, The Macmillan, 1917, pp.15-16.
- (5) ハリスはセントルイス教育委員会が発刊する年報において次のように述べていた。「『小さな子どものための仕事場』(Kleinkinderbew ahranstalten) は、そのような機関がほとんど発達していない国にとって、教育システムの真の基礎となるだろう。幼児は、そこではアルファベットを学ばないし、絵本や幼児の理解できるもの以外にはどのような書物も用いられない。しかし、彼は考えることを好むようになり、悪い道徳の影響や不正確な言語から引き離されて言葉を正しく用いるようになる。このようにして彼らは完全に精神的な準備ができてから小学校に入学することになるのである」(Harris, W. T., "Report of the Superintendent", *Fourteenth Annual Report of Board of Directors of the St.Louis Public Schools*, 1868, p.81)。
- (6) Vandewalker, *op.cit.*, pp.184-187.
- (7) スチュアート (S. A. Stewart) の発案によるもので、当時の全米における幼稚園への関心の高まりを受けると同時に、翌年にシカゴで予定されていた万国博覧会の幼稚園の出展の準備を目的として設立された。
- (8) Shapiro, Michael Steven, *Child's Garden: The Kindergarten Movement from Froebel to Dewey*, The Pennsylvania State University Press, 1983, p.119.
- (9) *Ibid.*, pp.166-167.
- (10) *Ibid.*, p.174.
- (11) International Kindergarten Union, Committee of Nineteen, *The Kindergarten Reports of the Committee of Nineteen on the Theory and Practice of the Kindergarten, Volume 1.*, Boston, New York, Chicago, Houghton Mifflin Co., 1913.
- (12) Hall, G. S., "Some Defects of the Kindergarten in America," *The Forum* 28(Jan., 1900), pp.579-591.
- (13) Dewey, J., *The School and Society*, Illinois, The University of Chicago Press, 1900, p.118 (デュエイ (宮原誠一訳)『学校と社会』岩波書店、1957年、pp.128-129.)
- (14) *Ibid.*, p.120 (同書、p.131.)
- (15) Mayhew, K. C. & Edwards, A. C., *The Dewey School, The Laboratory School of the University of Chicago 1896-1903*, Atheron Press, 1965, pp.42-55 (キャサリン・キャ

- ンプ・メイヒュー、アンナ・キャンブ・エドワーズ著（小柳正司監訳）『デューイ・スクールーシカゴ大学実験学校：1896年～1903年―』あいら出版、2017年、pp.24-31.)
- (16) Blow, S. E., *Educational Issues in the Kindergarten*, New York, D. Appleton & Co., 1908, pp.52-53.
- (17) 阿部真美子・別府愛・滝沢和彦・菅野文彦・W.H. キルパトリック他『アメリカの幼稚園運動』明治図書、1988年、p.243.
- (18) 同書、pp.240-241.
- (19) その他のメンバーには、幼稚園指導者ラウラ・A・パーマー（Luella A. Palmer）、幼稚園教育の専門家ジュリア・ウェイデ・アボット（Julia Wade Abbot）、幼稚園と小学校の監督者ベルタ・バーヴィス（Bertha Barwis）、倫理文化学校教員養成学部指導者コリーネ・ブラウン（Corinne Brown）、ミズーリ大学工芸科助教授エラ・ヴィクトリア・ドブス（Ella Victoria Dobbs）、ワシントンD.C.教育委員会教育システム専門家フローレンス・C・フォックス（Florence C. Fox）、リッチモンド幼稚園と小学校第1学年の監督者マリオン・S・ハンケル（Marion S. Hanckel）、ウースター教育長アリス・L・ハリス（Alice L. Harris）、リンカーン小学校第1学年教師ガイル・ハリソン（Gail Harrison）、マンハッタン公立学校副校長ルーゼ・F・スペクト（Louise F. Specht）がいた。（A Subcommittee of the Beureau of Education Committee of the International Kindergarten Union, *A Kindergarten-First-Grade Curriculum*, Washington, Government Printing Office, 1922, p.VI.）
- (20) *Ibid.*.
- (21) Hill, P. S., *A Conduct Curriculum for the Kindergarten and First Grade*, New York, Charles Scribner's Sons, 1923, p.XV.
- (22) *Ibid.*, p.10.
- (23) Parker, S. C. & Temple, A., *Unified Kindergarten and First-Grade Teaching*, Ginn & Co., 1925.

【付記】本研究は、日本学術振興会科学研究費（課題番号 22K13628）の助成を受けている。